

岩手大学工学部 正会員 安藤 昭  
 岩手大学工学部 学生員 大高 清  
 岩手大学工学部 学生員 清水 賢治

## 1. まえがき

一般に文化景観の環境設計は視覚環境の修景にとどまらず、それらに対する市民のイメージ分析にもとづいた環境の創造まで行なわれなければならないと考える。特に中小都市における城郭の環境設計を行なう場合には、ほとんどの城址が複雑多岐な利用のされ方をしているわけであるから、この点ねらの検討がいうそう重要となってくる。本研究は、この様な観点からイメージ分析を取り上げているのである。ここでは不采方城址のイメージの構造に関する一考察を述べることにする。

## 2. イメージの定義

たいていの複雑な現象の定義がそうであるように、イメージの定義もなかなか難しい。イメージは残像・直観像、記憶心像、想像心像の4つに分類されるといわれ、この心像のすべてを説明しうる明確な定義は見い出されていない。しかし、本研究で取り扱うものは記憶心像であるので、この点について考察し、次のように定義する。すなわち、記憶心像とは感覚的、知覚的、感情的、その他の体験状態が過去にあったものとして認知し、具体的に再生したもののすべてを呼ぶこととする。

今後本論においては、この記憶心像をイメージと呼ぶこととする。このイメージは単にイメージとして終るものではなく、イメージに対する評価も行なわれ、そこから情緒(情操も含む)が表わされたり、この評価を通じて人間の行動をコントロールするといわれている。この点に注目するゆえ、城址のイメージとその構造の分析を行うのである。

## 3. イメージの現れ方

多くの場合、イメージの現れ方とイメージの対象とは感覚的類似をもっている。すなわち視覚的な物は視覚心像により、聴覚的な物は聴覚心像により代表される。しかし場合によっては全く異なったイメージによって代表されることもある。これは特にある種の感覚に偏している人のことを視覚型あるいは言語型と呼ばれる。この点をも考慮するならば、再生方法を2つの方法で行うのが望ましいと思われる。ここでは、自由な言語による再生と自由な地図による再生により行なった。

## 4. イメージの再生に関する仮説

イメージの再生の量は以下に示すような3つの理由の組合せによって決定される。

- (1) 建物の物理的形の特異性と強度
- (2) 目につきやすさの強度
- (3) 使用頻度および使用特異性、文化的価値

(3)を社会的有意味度の尺度としてまとめ、(1)(2)(3)を尺度化して表-1, 2, 3に示す。この仮説の設定はドナルド・アフリヤードの研究にもとづき、城址のイメージの調査に合うように修正したものである。表-1に示すように、構造物の再生に役立っていると仮定された属性は、構造物の外観上の動き、輪郭、大きさ、形、色彩、材質

表-1 形の強度と特異性の尺度

|     |                                                                              |
|-----|------------------------------------------------------------------------------|
| 動き  | 構造物付近における人々や車、なびいている旗、落下している水、川の流れ、などの動的要因の大小                                |
| 輪郭  | 他の構造物や地形などの境界からどれだけ目立つ形があるか、または不明に続く境界、あるいは境界は不明であるが孤立している構造物、または孤立した構造物の孤立性 |
| 大きさ | 構造物の大きさの感じに対する比較                                                             |
| 形   | 単純な形、二・三の要素からなる構造物、多くの要素からなる複雑な構造物、などの観点からの比較                                |
| 色彩  | 無彩色が目立たない色、彩色、派手なコントラスト、白・黒・赤などの色などの観点からの比較                                  |
| 材質  | 構造物を構成している材質感の比較                                                             |
| 標示  | 構造物の名称の標示に対する明瞭さの比較                                                          |

および標示などの強度と特異性である。構造物の比較上の特殊性は、構造物の視覚上における絶対的強度よりも再生に影響する場合もあると思われるので、これらの属性に関しては2つの判定を行なった。次に表-2に示した目につきやすさの尺度としては、視点の強度、位置の特異性、識別距離の3つの属性を選定した。視点の強度は、構造物が一番よく見られる視点からその構造物を見る人々の数によって決定した。位置の特異性に関しては、直線道路のそばにおける構造物のランクを低くするようにしたのは、通行人の注意が引きつけられるレベルが低いと思われるからである。最後に表-3に示した社会的意味の尺度としては、構造物の使用頻度、使用特異性、象徴度の3つの属性によって判定した。ここにおける使用特異性は、イメージの再生と正の相関になるように、限られた人が使用する場合を低いランクにするようにした。以上の項目では説明しきれないが、再生される構造物については文化的価値が高いものと考え、象徴度の属性を適用した。

#### 5. イメージの再生と属性の関係について

調査対象構造物を表-4に示す。ここで仮定した属性が再生の基礎となっているかどうか明らかにするために、属性間の相互相関を検討し、構造物の属性と再生の頻度の相関を求めた。属性間の相互相関は、全ての属性について調査対象構造物に対するランクの高低についての一対比較を行ない、尺度の定量化を行なった。ついで属性のそれぞれについて基準化し、データ行列を作成して相関を求めた。

これらの操作をくり返すことにより、どの属性が再生の基礎になっているかを検討した。詳しくは講演時に述べる。

#### 参考文献

- 1) A・リチャードソン：心像，紀伊國屋書店
- 2) ドナルド・アブラハム：なぜ建物は認知されるか，彰国社
- 3) 感覚+知覚心理学ハンドブック，誠信書房

表-2 目につきやすさの尺度

|        |                                                     |
|--------|-----------------------------------------------------|
| 視点の強度  | 構造物を公園内の遊歩道から見ると、小径から見ると、主要な街路から見る場合の人数の点の比較        |
| 位置の特異性 | 直線道路のそばを低くし、道路のカーブ付近を中心とし、支路・支路付近および広場の中央を高くし、場所の比較 |
| 識別距離   | 材質において空間的意味作用を發揮する高、形態においてその付加の景観と其に低くし、場所の比較       |

表-3 社会的意味の尺度

|       |                                              |
|-------|----------------------------------------------|
| 使用頻度  | 自分で使用する頻度の大小                                 |
| 使用特異性 | 限られた人が使用する場合を低くし、限られた人が使用する場合を高くし、使用頻度の大小を比較 |
| 象徴度   | 市民に対するシンボル性の大小の比較                            |

表-4 調査対象構造物

|    |               |
|----|---------------|
| 1  | 武徳殿           |
| 2  | 母山神社          |
| 3  | 県立図書館         |
| 4  | サン・セリ公館       |
| 5  | 教育会館          |
| 6  | セトラルホテル       |
| 7  | 動物園           |
| 8  | 鐘楼            |
| 9  |               |
| 10 | 啄木の歌碑         |
| 11 | 新渡戸稲作の記念碑     |
| 12 | 像の台座(本)       |
| 13 | 二の丸の石礎(三の丸側)  |
| 14 | イワマ駄店         |
| 15 | 公園内の店群(蕎麦所など) |
| 16 | 茶店            |
| 17 | 消函本部          |
| 18 | 花時計           |
| 19 | 公園案内板         |
| 20 | 二の丸の石礎(母山本)   |